

チョビ髭 「田中冬二研究」に寄せて

背の高い田中さんが僕の肩を抱くやうにして言った
「気を落してはいけません」
箱根の山々を秋の風が吹いてゐた
眼下には茶色になつた草に覆はれた山があつた
枯れ草は風にそよぎ 風の向きが変わるとまた枯れ草はそちらにそよぐ
「あれを見てごらんなさい
けだもののやうに見えてならない
山が 息づいてゐます」
田中さんはささやくやうに言った
「撫でてやりたいやうです
気を落してはいけません
僕もあなたと同じやうな目にあつたことがありました
苦境に立つことはありますよ」
田中さんのチョビ髭が僕のすぐ側にあつた
言葉につれて 動いた
秋の空は 高く 清く
僕は田中さんも自分もけだもののやうな気がした
おそろしい自然の中で哀れに生きてゐる
かたみに 同類の血と心を感じあつてゐた